

審査結果の要旨

報告番号 乙 第 3069 号	氏名 片桐 光浩
審査担当者	主査 川口 巧 (印) 副主査 石橋 生哉 (印) 副主査 田上 秀一 (印)
主論文題目: Development of an Algorithm to Predict Recurrences After Resection of Liver Metastases in Patients With Metastatic Colorectal Cancer (大腸癌肝転移患者における肝転移巣切除後の予後予測のアルゴリズムの開発)	

審査結果の要旨(意見)

本論文は、大腸癌肝転移 47 例を対象に、化学療法による CT 値および CEA 値の変化と肝切除後の患者予後との関連を検討している。化学療法前後の CT 値変化速度 (CTv Δ) を算出し、CTv Δ _high もしくは CTv Δ _low 群の 2 群に群分けしている。CEA は、正常化群と CEA 高値群の 2 群に群分けしている。解析の結果、CTv Δ の 2 群間、および CEA の 2 群間に、切除後無再発生存および全生存に有意差を認めなかった。しかし、CTv Δ _high かつ CEA 正常化群は、その他の群と比較して切除後無再発生存率、および全生存率ともに有意に高率であった。日常診療で得られる情報と大腸癌肝転移切除後患者の予後との関連を明らかにした本論文は、進行大腸癌の治療方針検討に有用であるだけでなく、その病態解明に貢献しうるものであり、学位に値する。

論文要旨

大腸癌肝転移には化学療法を行い、切除可能な場合は切除をめざすのがコンセンサスとなっている。しかし、どのような条件が整えば切除を行うのかについて明確な指標はない。また、肝切除後の補助療法についてもどのような条件があれば補助療法を施行するのかに関して一定の見解はない。この研究では化学療法の前後で施行される造影 CT 検査および CEA 値を利用し、大腸癌肝転移切除症例の切除後の予後を比較することで簡易的な予後予測マーカーとなりうるか解析を行うことを目的とした。対象は 2000 年から 2012 年に当院で大腸癌肝転移に対し化学療法後に肝切除術に至った 47 例。方法は化学療法前後の造影 CT の肝転移巣 CT 値を正常肝 CT 値で標準化する。化学療法前の腫瘍 CT 値を加療後 CT 値で除し、さらに CT 検査間隔 (日数) で除する CT 値変化速度 (CTv Δ) を計算する。CTv Δ を 75% タイルでカットオフ値と設定、CTv Δ _high 及び CTv Δ _low 群とし 2 群間で臨床病 理学的因子及び肝切除後の全生存 (OS)、切除後無再発生存 (RFS) について統計学的に比較した。CEA は、化学療法後 CEA が正常化した群 (normalize 群)、CEA 高値群 (high 群) の 2 群に層別化した。CTv Δ _high かつ CEA が正常化群を Rapid and normalize (RN) 群、それ以外を non-RN 群として 2 群間で肝切除後の OS、RFS 比較を施行した。結果は CTv Δ 因子のみ、あるいは CEA 値因子のみでは RFS、OS ともに有意差を認めなかったが、RN 群と non-RN 群との比較では RFS (P=0.0499)、OS (P=0.0195) ともに RN 群で有意に予後良好だった。CTv Δ と CEA の組み合わせで、肝切除後の予後の層別化を簡易に行うことができた。大腸癌肝転移症例において肝切除適応の決定や肝切除後の補助療法の必要性を決定する上で有用な指標となる可能性がある。